

大和  
思想

五章

## 五章

# 「大和思想を実践する人」のあり方 （「共存共栄の世の中」における 「人間」のあり方）

## 目次

序文 5

常に、自ら率先して、普段自分が関わっている  
「全体」をまとめている 8

常に、あらゆる「恩恵」に心から  
「感謝」している 12

常に、自分の「運命」を受け入れている 21

常に、「共存共栄の世の中を維持、つくりだす物事」  
と「共存共栄の世の中を乱す物事」を  
見分けている 35

「論理的思考能力」を持っている 41

「優先順位が一番」を「世の中全体」にしている  
(自己犠牲の精神を持っている) 55

「謙譲の精神」を持っている 66

「優しさ」と「厳しさ」を持っている 71

「勇気」と「精神的強さ」を持っている 76

常に「平常心」を保っている 81

常に「向上心」を持っている 87

常に「真剣さ」を持っている 92

常に「健康」を維持している 97

# 五章

「大和思想を実践する人」  
のあり方（「共存共栄の世  
の中」における「人間」  
のあり方）

## 序文

「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての「人」を「『共存共栄の世の中』を維持して生きている状態」にする必要があります。

また、実際にそうするためには、まず、はじめに、「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方（『共存共栄の世の中』を維持するためには、世の中の全ての人は、どのような状態で存在している必要があるか）」を具体的に描き出す必要があります。

「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」を具体的に描き出す。

そして、「世の中の全ての『人』の現状」を正確に把握する。

そして、具体的に描き出した「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」と「世の中の全ての『人』の現状」を照らし合わせて、「『共存共栄の世の中における人間のあり方』でない部分」を「『共存共栄の世の中における人間のあり方』の状態」に変える。

このようなプロセスを経ることによって、「世の中の全ての『人』を『共存共栄の世の中を維持して生きている状態』にすること」ができるのです。

このようなことから、「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」を具体的に描き出すことは、世の中の全ての人を「『共存共栄の世の中』を維持して生きている状態」にする上で、根本的に重要なことだと言えます。

そこで、五章では、「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方（『大和思想を実践する人』のあり方）」について説明したいと思います。

さて、「『共存共栄の世の中』を維持して生きる」というところさえ、しっかり押さえていれば、どのような「生き方」をしていても、それは「『共存

『共存共栄の世の中』を維持して生きている状態」なので、「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」には様々なものがあります。

これから説明することも、その中の一つで、これが「唯一絶対のあり方」というわけではありません。

これから説明することは、「大和思想」が考える「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」です。つまり、「『大和思想を実践する人』のあり方」です。

ですが、これから説明することは、「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」上で、とても重要なことばかりです。

「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人、大体は、そのような状態で存在している必要があるのです。

ですから、これから説明することはしっかり理解してください。

そして、「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」を、頭の中に、具体的に描き出してください。

「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」を具体的に描き出すことができれば、後は、世の中の全ての人を「その状態」にするだけで、世の中の全ての人が、「『共存共栄の世の中』を維持して生きている状態」になるのです。

## 常に、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体」をまとめている

それでは、まず、はじめに、「『大和思想を実践する人』のあり方」の「根本」である、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめている」ということについて説明したいと思います。



「大和思想を実践している人」は、常に、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体」をまとめています。

つまり、常に、自ら率先して、「普段自分が関わっている『全体』を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その全体の目的を実現している状態』にするための働きかけ」をしています。

世の中の全ての人、普段の生活の中で、「家族」「地域社会」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」「世界」等、様々な「全体」と関わっていますが、「大和思想を実践している人」は、それらの中にあって、「ただ、なんとなく過ごしている」のではなく、常に、自ら率先して、「その『全体』を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その全体の目的を実現している状態』にするための働きかけ」をしているのです。

「家族」においては、常に、自ら率先して、「家族を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その家族の目的を実現している状態』にするための働きかけ」をしています。

「地域社会」においては、常に、自ら率先して、「その地域社会を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その地域社会の目的を実現している状態』にするための働きかけ」をしています。

「友人の集まり」においては、常に、自ら率先して、「その友人の集まりを『共存共栄の世の中を維持しつつ、その友人の集まりの目的を実現している状態』にするための働きかけ」をしています。

「会社」においては、常に、自ら率先して、「会社を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その会社の目的を実現している状態』にするための働きかけ」をしています。

「国家」においては、常に、自ら率先して、「国家を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その国家の目的を実現している状態』にするための働きかけ」をしています。

そして、「世界」においては、常に、自ら率先して、「世界を『共存共栄の世の中』にするための働きかけ」をしているのです。

このように、「大和思想を実践している人」は、「家族」「地域社会」「友人の集まり」「学校」「会

社」「国家」「世界」、その他、どのような「全体」にあっても、「常に、自ら率先して、その『全体』をまとめている」のです。

「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人が、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる（『共存共栄の世の中』を維持している状態にする）」必要があります。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめている」のです。

さて、このように、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめている」のが、「『大和思想を実践する人』のあり方」の「根本」なのです。

この後説明することは、この「『大和思想を実践する人』のあり方」の具体的な部分だと考えてください。

# 常に、あらゆる「恩恵」に心から「感謝」している

「大和思想を実践している人」は、常に、あらゆる「恩恵」に心から「感謝」しています。

世の中の全ての人は、「自然」や様々な「人」や「全体」から、様々な「恩恵」を、「常に」、また「すでに」受けています。

世の中には、「自分は自分の力で生きている」と錯覚している人がいますが、人間は、「自然」や様々な「人」や「全体」から、様々な「恩恵」を受けなければ、生きていくことはできません。

赤ちゃんのときは、自分で食事をすることも着替えることもできないので、全てのことを周りの人にしてもらう必要があります。

また、人間が成長するためには、様々な人に、

様々なことを教えてもらう必要があります。

また、人間が生きていくためには、「家族」「国家」等のサポートが不可欠です。

また、ほとんどの人は、収入を得るために「会社」を必要としています。

また、「食料」「衣料」「生活用品」「工業製品」「建造物」等は、基本的に、自分以外の誰かがつくってくれています。

また、人間の「食料」は全て「生物」からつくられていますし、生きるために必要となる「酸素」も「植物」によって作りだされています。

これらのことから分かるように、人間は、「自然」や様々な「人」や「全体」から、様々な「恩恵」を受けなければ、生きていくことはできないのです。

ですから、このことから、世の中の全ての人は「自然」や様々な「人」や「全体」から、様々な「恩恵」を、「常に」、また「すでに」受けている

と言えるのです。

さて、世の中の全ての人は、「自然」や様々な「人」や「全体」から、様々な「恩恵」を、「常に」、また「すでに」受けているので、「大和思想を実践している人」は、当然のこととして、常に、あらゆる「恩恵」に、心から「感謝」しています。

「大和思想を実践している人」は、「自分を育ててくれた両親」「自分を成長させてくれた人」「お世話になった人」に、常に、心から「感謝」しています。

「心の支えになってくれる人」「困ったときに助けてくれる人」にも、常に、心から「感謝」しています。

「普段自分が関わっている『家族』『学校』『会社』『国家』等の『全体』をつくってくれた人」「『それらを維持するための働きかけ』をしてくれている人」、また、「過去に、その『働きかけ』をしてくれた全ての人」にも、常に、心から「感謝」しています。

「自然」そのものにも、「『自然界』に存在する全ての生物」にも、常に、心から「感謝」していません。

また、直接ではなく、間接的に「恩恵」を受けているものにも、常に、心から「感謝」していません。

「『世のため』『人のため』になることを一生懸命行なっている人」

「どのような状況にあっても、決して『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱さないで生きている人」

「『共存共栄の世の中を維持、つくりだすために必要な情報』を必死に伝えている人」

「『共存共栄の世の中を維持、つくりだして生きる人』を育てている人」

「自ら率先して『家族』をまとめている人」

「どのようなことがあっても、決して『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱さないで活動している会社」

「どのようなことがあっても、決して『共存共栄の世の中（世の中の調和）』を乱さないで活動している国家」

「『共存共栄の世の中』を支えている『物質』や『生物』」

「大和思想を実践している人」は、このような間接的に「恩恵」を受けているものに対しても、常に、心から「感謝」しているのです。

また、人は誰でも、「自分が『恩恵』を受けていること」に気付かなかったり、受けた「恩恵」を忘れてたりするので、「大和思想を実践している人」は、「気付いていなくても様々な『恩恵』を受けていること」を考え、常に意識して、様々な「恩恵」に心から「感謝」しています。

たとえ目立たなくても、人知れず「『共存共栄の世の中』を維持するための働きかけ」をしている人がいることを考え、常に意識して、心から「感



謝」しています。

経済、学問、スポーツ、芸能等、様々な分野において「成功する人」がいますが、「成功しなかった人」の働きや存在も、それぞれの業界の発展や存続に、大きく貢献している側面があるので、「成功しなかった人」にも、常に意識して、心から「感謝」しています。

人間の「食物」は全て「生物」からつくられるので、「食物を食べる」ということは「様々な生物を殺す」ということですし、家を建てるとき、道路を造るとき、トンネルを掘るとき等にも、多くの生物を殺さなければ、それらを行なうことはできません。

このように、「人間の生活」は、多くの生物の「犠牲」の上に成り立っているので、人間のために「犠牲」になっている全ての生物にも、常に意識して、心から「感謝」しています。

また、当然のように存在している「自然」「地球」「太陽」「宇宙」ですが、人間は、それらがなければ生きていけないので、それらの「恩恵」にも、常に意識して、心から「感謝」しています。

このように、「大和思想を実践している人」は、「気付いていなくても様々な『恩恵』を受けていること」を考え、常に意識して、様々な「恩恵」に心から「感謝」しているのです。

世の中の全ての人は、「自然」や様々な「人」や「全体」から、様々な「恩恵」を、「常に」、また「すでに」受けています。

ほとんどの人は、このことを忘れていますが、人間は、それらの「恩恵」を受けているからこそ、「生きること」ができています。

ですから、「大和思想を実践している人」は、当然のこととして、常に、あらゆる「恩恵」に心から「感謝」しているのです。

さて、「大和思想を実践している人」は、常に、あらゆる「恩恵」に心から「感謝」しているのですが、そうしているのには、別の理由もあります。

「『大和思想を実践する人』のあり方」の「根本」は、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめていること」ですが、そのた

めの「意欲」を維持し続けるのは簡単ではありません。

特に、肉体的、精神的に疲れているときには、その「意欲」は薄れてしまいます。

ですが、自分が、様々な「恩恵」を「常に」、また「すでに」受けていることを意識し、常に、あらゆる「恩恵」に心から「感謝」していれば、少なからず、「自分も『恩恵』を受けるだけでなく、世の中に貢献しなければならない」という気持ちになるので、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめる」ための「意欲」が湧いてきます。

つまり、「大和思想を実践している人」は、「『常に、自ら率先して、普段自分が関わっている全体をまとめる』ための『意欲』を維持する」ためにも、常に、あらゆる「恩恵」に心から「感謝」しているのです。

さて、このように、「大和思想を実践している人」は、「様々なものから、様々な『恩恵』を『常に』、また『すでに』受けているから」、また、「『常に、

自ら率先して、普段自分が関わっている全体をまとめる』ための『意欲』を維持するため」に、常に、あらゆる「恩恵」に心から「感謝」しているのです。

「感謝」は、「気が向いたとき」にだけ、「自分に都合のいい人」にだけするものではありません。

「嫌なこと」や「納得できないこと」があっても、「嫌いな人」に対してでも、受けた「恩恵」に対しては、必ず行なうのが「感謝」です。

また、「感謝」は人に求めるものではありません。

人は、「感謝の気持ち」があっても、それを行動で示さないことがあります。

そのようなときに、相手に無理矢理「感謝」させようとする、それが原因で、「人間関係」が悪くなることがあります。

ですから、「大和思想を実践している人」は、人に「感謝」を求めることなく、ひたすら、自分が「感謝」しています。

「人にかけて『恩』は忘れ、自分が受けた『恩』は忘れない」というのが基本で、常に、自分が「感謝」しているのです。

このように、「大和思想を実践している人」は、常に、あらゆる「恩恵」に心から「感謝」しているのです。

## 常に、自分の「運命」を受け入れている

※ここで言う「運命」とは、「人生で起こる全ての出来事」のことで、「神が定めたこと」「『生まれてから死ぬまでの間に起こる全ての出来事』は、神によって定められている」等のことではありません。

「大和思想を実践している人」は、常に、自分の「運命」を受け入れています。

人間には「欲」があります。

ここで言う「欲」とは、「～が欲しい」「～を手に入れたい」といった「欲求」のことですが、この「欲」が湧いた時点では、つまり「～が欲しい」と思った時点では、「その『～』は手に入れていない状況」にあります。

ですから、人間は「～が欲しい」「～を手に入れたい」と思うと、「その『～』を手に入れた状況(欲が満たされた理想の状況)」と「『～』を手に入れていない現状(欲が満たされていない現状)」の「差」に、少なからず「不満足(精神的苦しみ)」を感じます。

また、「～をしたくない」というのも同じで、「～をしたくない」と思った時点では、「『～』をしなければならない状況」にあります。

ですから、「～をしたくない」と思うと、「『～』をしなくていい状況(欲が満たされた理想の状況)」

と「『～』をしなければならぬ現状（欲が満たされていない現状）」の「差」に、少なからず「不満足（精神的苦しみ）」を感じます。

このように、人間は、「『理想（欲が満たされた理想の状況）』と『現実（欲が満たされていない現状）』の間に『差』があること」によって「不満足（精神的苦しみ）」を感じるので、「もっといい生活がしたい」「もっと強くなりたい」「もっとキレイになりたい」「もっとお金が欲しい」「もっと権力を手に入れたい」「もっと癒されたい」「もっといい人に出会いたい」「もっと楽しみたい」「出世したい」「有名になりたい」「相手にされたい」「いい家に住みたい」「旅行をしたい」「努力をしたくない」「仕事をしたくない」「勉強をしたくない」と思えば思うほど、より多くの「不満足（精神的苦しみ）」を感じることになります。

また、それを強く思えば思うほど、「理想」と「現実」の「差」が明確になるので、より強い「不満足（精神的苦しみ）」を感じることになります。

このことから分かるように、「欲」とは、「『多ければ多いほど』『強ければ強いほど』、より大きな

『苦しみ』を味わうもの」なのです。

また、「欲」には「食欲」「性欲」「睡眠欲」のように、生きるため、種族を存続させるために「全ての動物が持っているもの」や、「発展欲」「向上心」のように、発展、成長するために「持っておいた方がいいもの」、また、「自分さえ良ければいい」という、相手のことを考えない「自分勝手」な「わがまま」な「我欲」等があります。

これらは全て「欲」ですが、いずれも、自分の「意志」とは関係なく勝手に湧いてきます。

つまり、「欲」とは、「自分の『意志』とは関係なく勝手に湧いてくるもの」でもあるのです。

また、「欲」は、一度満たされれば、もう一度満たしたくなり、手に入れられると思っただけでも、手に入れなければ気がすまなくなるというように、「尽きることがないもの」「限度がないもの」でもあります。

このように、「欲」とは、「『多ければ多いほど』



『強ければ強いほど』、より大きな『苦しみ』を味わうもの」であり、「自分の『意志』とは関係なく勝手に湧いてくるもの」であり、「尽きることがないもの」「限度がないもの」なのです。

ですから、人間は、「『欲』をしっかりとコントロールすること」ができなければ、「欲」に振り回されて、多くの「苦しみ」を味わうことになるのです。

さて、人間は、「『欲』をしっかりとコントロールすること」ができなければ、多くの「苦しみ」を味わうことになるので、人間が「幸福」になる上で、「『欲』をしっかりとコントロールすること」はとても重要なのですが、「欲」をしっかりとコントロールし、「苦しみ」を解消する上で有効なのが、「自分の『運命』を受け入れること」です。

例えば、人によっては「困難」に直面すると、「困難がなければいいのに」という、「困難がない状況」を欲する「欲」を持ちますが、このような「欲」でも、強く持てば持つほど「理想」と「現実」の「差」が明確になるので、より精神的に苦

しむことになります。

ですが、どのような「困難」に直面しても、「そういうこともある」「人生は山あり谷ありである」「世の中には『自分よりも大変な状況にいる人』がいる」と考え、「自分の『運命』を受け入れること」ができれば、じたばたせず、「前向きに生きる覚悟」を決められるようになるので、「精神的苦しみ」は、少なからず解消されます。

また、人によっては、年をとって体力が衰え、若い頃と同じように活動することができなくなると、「年はとりたくない」「若くありたい」という「若さ」を求める「欲」を強く持つようになります。

そして、その「理想」と「現実」の「差」に苦しむことになります。

ですが、たとえ年をとって体力が衰えても、「人生とはそういうものである」「全ての人と同じ経験をしている」「年相応であることが大切である」と考え、「『年をとること』を受け入れること」ができれば、必要以上の「気負い」や「若者と張り合う気持ち」がなくなり、気持ちが楽になります。

また、人間には「生きよう」とする「欲」があるので、人によっては「死」に直面すると、「生きたい」という「欲」を必要以上に強く持ちます。

そして、そのために、かえって「恐怖」に怯え、苦しむことになります。

ですが、たとえ「死」に直面しても、「生きているものは必ず死ぬ」「人が死ぬのは自然なことである」「『生まれること』と『死ぬこと』はセットになっている」「人間は、ただ生きて、ただ死ぬだけである」「生まれた瞬間から『死へのカウントダウン』は始まっている」と考え、「死を受け入れること」ができれば、「死」に対する「恐怖心」が減り、「死」に直面しても「落ち着き」「心の平静さ」「平常心」を保つことができるようになります。

また、「怒られること」「嫌われること」「失敗すること」は、誰にとっても嫌なことなので、人によっては、そうなったとき、もしくは、そうなりそうなときに、「それを避けたい」という「欲」を強く持ちます。

そして、そのために、必要以上に動揺したり、取り乱したり、落ち込んだり、悲しんだりします。

ですが、そのようなことも、「次回から気を付ければいい」「すでに起こったことは仕方がない」と受け入れることができれば、必要以上に動揺したり、取り乱したり、落ち込んだり、悲しんだりすることはなくなります。

また、「出世」「名声」「地位」「成功すること」を望むのは自然なことです。人によっては、それを必要以上に強く求めてしまい、そのために、活動がうまくいかないときや、作業がはかどらないときに、「イライラ」「せかせか」し、「ストレス」を多く抱えてしまいます。

ですが、たとえ「高い理想」を持っていたとしても、それと同時に、「自分の『運命』を受け入れる感覚」もしっかり持っていれば、どのような状況になっても、どのような結果になっても、常に「冷静さ」を保っていられます。

また、経済、学問、スポーツ、芸能等、様々な分野で、「一時的に脚光を浴びた人」が、その後、脚光を浴びなくなるときに、過去の栄光に縛られて、「現在の自分を受け入れられないこと（『いつまでも脚光を浴びていたいという欲』を強く持つこと）」があります。

そして、そのために苦しみ、「投げやり」になったり「自暴自棄」になったりすることがあります。

ですが、「自分は、一時的にでも脚光を浴びたのだから恵まれている」「自分は一時的にでも、他の人より世の中に貢献できたのだから恵まれている」と、「現状を受け入れること」ができれば、「プライド」や「プレッシャー」から解放されて、気持ちが楽になります。

また、人によっては、思い出したくない程の「後悔」や「失敗」や「嫌な経験」があると、それを受け入れることができず（「それがなければいいのに」という「欲」を強く持ち）、そのために、いつまでも苦しい思いをし、「前向きに生きること」ができなかつたり、「うつ」になつたりすることがあります。

ですが、そのようなことも、「失敗をしない人など、どこにもいない」「失敗は次に生かせばいい」「過ぎたことをいつまでも考えていても仕方がない」「いつまでも、くよくよしていても意味がない」と受け入れることができれば、気持ちが切り替わり、「過去にとらわれずに、未来に目を向けよう」「過去はともかく、これからの人生をいいものにしよう」という、「前向きに生きる意欲」が湧いてきます。

また、「能力」や「人格」を向上させる上で「理想を高く持つこと」は重要ですが、「理想を高く持つ」だけで、「失敗」「自分の短所」「能力が劣っていること」「うまくできないこと」等を受け入れる感覚を持っていなかつたら、「理想」と「現実」の「差」が必要以上に気になつたり、「失敗」したときの「ショック」が大きくなつたりします。

ですが、「『ありのままの自分』を受け入れる感覚」「どのような結果でも受け入れる感覚」をしっかり持っていれば、常に「落ち着き」「心の平静さ」を保っていられます。

また、世の中には、「何でも『自分の思いどおり』にしたい」「細かいところまで『自分の思いどおり』でなければ気がすまない」と言う人がいますが、人生では、「自分が望んでいないこと」がたくさん起こりますし、世の中には、「『自分の思いどおり』にならないこと」がたくさんあるので、そのような感覚を強く持っている、毎日起こる「『自分の思いどおり』にならないこと」に、いちいち腹を立て、「自分が望んでいないこと」に、いちいち「ショック」を受け、毎日の生活が嫌になり、人生そのものが苦痛になってしまいます。

ですが、「何から何まで『自分の思いどおり』になるはずがない」「全ての人と同じ状況の中で生活している」と考え、「普段の生活の中で起こる全ての出来事」を受け入れることができれば、そのような苦しみはなくなり、「心の平静さ」を保てるようになります。

また、「努力に対する『正当な評価』を求めること」や「貢献したことに対する『正当な見返り』を求めること」は、ある意味当然ですが、そのよ

うな「正当な欲」でも、それを強く持っているとき、それが受けられなかったときに、とても大きなショックを受け、非常に落ち込むことになります。

ですが、たとえ、それが受けられなかったとしても、「そういうこともある」「悪いことをしたわけではないのだから問題ない」と考え、それを受け入れることができれば、それによって苦しむことはなくなります。

このように、人間は「欲」を強く持つと、それだけ精神的に苦しむことになるのですが、「自分の『運命』を受け入れること」ができれば、その「苦しみ」はなくなるのです。

人間の全ての「精神的苦しみ」は、「『理想（欲が満たされた理想の状況）』と『現実（欲が満たされていない現状）』の間に『差』があること」によって生まれます。

ですが、「自分の『運命』を受け入れること」ができれば、その「差」は解消されるのです。

そして、その「差」が解消されるので、「苦しみ」も解消されるのです。

ですから、どのようなことがあっても、「自分の『運命』を受け入れること」ができれば、それによって苦しむことはないのです。

世の中には、「欲」を多く、強く持つことによって苦しんでいる人がたくさんいますが、誰でも、「自分の『運命』を受け入れること」ができれば、その「苦しみ」は、少なからず、解消されるのです。

さて、「大和思想」は、『『共存共栄の世の中』を実現させ、世の中の全ての人と共に『幸福』になる』という、非常に高い「理想」を掲げています。

ですから、もし「大和思想を実践している人」が、「自分の『運命』を受け入れる感覚」を持っていなかったら、「理想」と「現実」の「差」に非常に苦しむことになります。

「家族」をまとめようと思っても、思うようにまとめられず、「地域社会」をまとめようと思っても、思うようにまとめられず、「友人の集まり」をまとめようと思っても、思うようにまとめられず、「会



社」をまとめようと思っても、思うようにまとめられず、「国家」をまとめようと思っても、思うようにまとめられず、「世界」をまとめようと思っても、思うようにまとめられない状況で、「自分の『運命』を受け入れること」「現実を受け入れること」ができなかったら、当然、非常に苦しむことになるのです。

そして、その「苦しみ」から、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめること」ができなくなるのです。

ですが、たとえば、自分の思うようにはまとめられなくても、「そういうこともある」「成功するのも、失敗するのも運命である」「自分にできることを精一杯頑張ることが大切である」「小さな変化が、いずれ大きな変化につながる」と考え、「自分の『運命』を受け入れること」ができれば、必要以上に苦しむことはなくなるのです。

そして、必要以上に苦しむことがなくなるので、常に「落ち着き」「平常心」を保てるようになり、それが保てるようになるので、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめる

こと」ができるようになるのです。

「常に、自分の『運命』を受け入れる」のは、「自分の『精神状態』を『いい状態』に保つための工夫」です。

また、それは、「『常に、自ら率先して、普段自分が関わっている全体をまとめている状態』を維持するための工夫」でもあるのです。

人間が「幸福」になる上で、「自分の『精神状態』を『いい状態』に保つこと」は、とても重要ですが、そのためには、「常に、自分の『運命』を受け入れる」必要があるのです。

また、「『大和思想を実践する人』のあり方」の「根本」は、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめていること」ですが、そのためにも、「常に、自分の『運命』を受け入れる」必要があるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「常に、自分の『運命』を受け入れている」のです。

## 常に、「共存共栄の世の中を維持、つくりだす物事」と「共存共栄の世の中を乱す物事」を見分けている

「大和思想を実践している人」は、常に、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだす物事」と「『共存共栄の世の中』を乱す物事」を見分けています。

「『大和思想を実践する人』のあり方」の「根本」は、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめていること」ですが、実際に、そうするためには、「常に、『共存共栄の世の中を維持、つくりだす物事』と『共存共栄の世の中を乱す物事』を見分けている」必要があります。

世の中には、「正しい情報」だけでなく「間違った情報」もありますし、「いい人」だけでなく「悪

い人」もいます。

また、「一見、『共存共栄の世の中を維持、つくりだしている』ように見えて、実際は、『共存共栄の世の中を乱している』物事」、また、その逆の「物事」もあります。

ですから、常に、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだす物事」と「『共存共栄の世の中』を乱す物事」を見分けていなければ、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめること」はできないのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、常に、それらを見分けているのです。

さて、「大和思想を実践している人」は、「常に、『共存共栄の世の中を維持、つくりだす物事』と『共存共栄の世の中を乱す物事』を見分けている」のですが、実際に、そうするためには、それらを見分けるための「判断の基準」を、明確に持っている必要があります。

この「判断の基準」とは、「直接的、間接的にかかわらず、最終的に『共存共栄の世の中を維持、

つくりだすこと』につながっているのか、それとも、最終的に『共存共栄の世の中を乱すこと』につながっているのか」という「観点」のことです。

どのような「物事」でも、この「判断の基準」に照らし合わせて考えれば、つまり、「それは、直接的、間接的にかかわらず、最終的に『共存共栄の世の中を維持、つくりだすこと』につながっているのか、それとも、最終的に『共存共栄の世の中を乱すこと』につながっているのか」を考えれば、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだす物事」なのか、「『共存共栄の世の中』を乱す物事」なのか分かります。

「直接的、間接的にかかわらず、最終的に『共存共栄の世の中を維持、つくりだすこと』につながっている」なら、それは、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだす物事」です。

逆に、「直接的、間接的にかかわらず、最終的に『共存共栄の世の中を乱すこと』につながっている」なら、それは、「『共存共栄の世の中』を乱す物事」です。

たとえば、一般的には「普通」と言われている「生き方」「考え方」、「必要」と言われている「社会のルール」「工業製品」であっても、「最終的に『共存共栄の世の中を乱すこと』につながっている」なら、それは「『共存共栄の世の中』を乱す物事」です。

逆に、一見「非常識」と思える「考え」「言動」、「不必要」と思える「政策」「社会活動」であっても、「最終的に『共存共栄の世の中を維持、つくりだすこと』につながっている」なら、それは「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだす物事」なのです。

このように、「直接的、間接的にかかわらず、最終的に『共存共栄の世の中を維持、つくりだすこと』につながっているのか、それとも、最終的に『共存共栄の世の中を乱すこと』につながっているのか」という「観点」を「判断の基準」にして考えれば、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだす物事」と「『共存共栄の世の中』を乱す物事」を見分けることができるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、常に、この「判断の基準」を持ち、あらゆる「物事」

を、この「判断の基準」に照らし合わせて見ている。

「人間のあり方、考え方、言動、服装、言葉遣い、立ち居振る舞い」「会社や商品のあり方」「メディアが発信している情報や表現のあり方」、「政治家の発言、行動、掲げている政策」「事件」「経済のあり方」「社会のあり方」「国家のあり方」、その他全ての「物事」を、この「判断の基準」に照らし合わせて見えています。

そして、たとえば、それが一般的には「普通」「正しい」「常識」と言われているものであっても、「それは、直接的、間接的にかかわらず、最終的に『共存共栄の世の中を維持、つくりだすこと』につながっているのか、それとも、最終的に『共存共栄の世の中を乱すこと』につながっているのか」を考え、それらを見分けているのです。

常に、このようにしていれば、世の中の全ての「物事」を見分けることができます。

また、常に、このような見方をしていれば、普段自分が関わっている「全体」の状況が「少しず

つ悪くなっていく」ときに、その「微妙な変化」を察知することもできるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、常に、この「判断の基準」を持っているのです。

そして、「常に、『共存共栄の世の中を維持、つくりだす物事』と『共存共栄の世の中を乱す物事』を見分けている」のです。

「『大和思想を実践する人』のあり方」の「根本」は、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめていること」ですが、常に、そうしているためには、「常に、『共存共栄の世の中を維持、つくりだす物事』と『共存共栄の世の中を乱す物事』を見分けている」必要があるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、常に、それらを見分けているのです。



## 「論理的思考能力」を持っている

※ここで言う「論理」とは、「物事」と「物事」の間にある「法則的なつながり、関係」という意味です。

また、「論理的に思考する」とは、「物事と物事を『正しく関係付けて』思考を進める」という意味です。

また、「論理的思考能力」とは、「物事と物事を『正しく関係付けて』思考を進める能力」という意味です。

また、ここで言う「思考する（考える）」とは、「『目的』を持って考えること」です。  
「『目的を実現させる方法』を考える」「『問題を解決する方法』を考える」「『失敗の原因』を考える」「『より良く行なう方法』を考える」というように、「目的」を持って行なうのが「思考する（考える）」です。

一方、「目的」を持たずに行なうのは、「思う（思っている状態）」です。

それは、「見たこと」「聞いたこと」「経験したこと」等に反応して「思っている」のであって、「思考している（考えている）」わけではありません。

「大和思想を実践している人」は、「論理的思考能力」を持っています。

「大和思想を実践している人」は、常に、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体」をまとめていますが、実際に「全体をまとめる」ためには、様々なことを「考える（思考する）」必要があります。

この「考える（思考する）」とは、「『正しい答えを導き出す』ために行なう行為」です。

「『目的を実現させる方法』を考える」「『問題を解決する方法』を考える」「『失敗の原因』を考える」「『より良く行なう方法』を考える」、その他、どのようなことを「考える」場合でも、「『正しい答え』を導き出すため」に「考える」のであって、

「『間違った答え』を導き出すため」に「考える」わけではありません。

ですから、「考える（思考する）」ときには、必ず、「正しい答えを導き出すこと」ができる方法で思考を進める必要があります。つまり、「論理的に思考する」必要があります。

「論理的に思考する」とは、「物事と物事を『正しく関係付けて』思考を進める」ということです。

つまり、「こうすれば、こうなる」「こうなることによって、そうなる」、そして「そうなることによって、目的が実現される」と考えるときに、「それぞれを『正しく関係付けて』思考を進める」ということです。

「こうすれば、こうなる」「こうなることによって、そうなる」、そして「そうなることによって、目的が実現される」と考えたとしても、それぞれが「正しく」関係付けられていなければ、そのとおりに作業を進めても「目的」は実現しません。

これは、「 $1 + 2 + 3 + 4 + 5$ 」を計算するとき

に、「 $1 + 2$ 」「その答え + 3」「その答え + 4」「その答え + 5」の、それぞれの計算が正しく行なわれなければ、最後の答えが正しくならないのと同じで、「思考する」ときも、それぞれを「正しく関係付けて」思考しなければ、最終的な答えは正しくならないのです。

ですから、「考える（思考する）」ときには、必ず「物事と物事を『正しく関係付けて』思考する」必要があるのです。つまり、「論理的に思考する」必要があるのです。

さて、どのようなことを「考える（思考する）」場合でも、必ず「論理的に思考する」必要があるので、「論理的思考能力」は、全ての人にとって必要不可欠なのですが、世の中には、「論理的に思考する」のが苦手な人がいます。

「『論理的に思考すること』ができない」ということは、「『物事と物事を正しく関係付けて思考すること』ができない」ということですが、それができない「原因」は、いくつかあります。

「論理的に思考すること」ができない「原因」の

一つは、そういう人は、「世の中の全ての『物事』に、それぞれの『法則（論理）』が備わっていること」「世の中の全ての『物事』が、それぞれの『法則（論理）』の上に成り立っていること」を理解していないからです。

世の中の全ての「物事」には、それぞれの「法則（論理）」が備わっています。

別の言い方をすると、世の中の全ての「物事」は、それぞれの「法則（論理）」の上に成り立っています。

ですから、何らかの「目的」を実現させるためには、それに備わっている「法則（論理）」に則って行なう必要がありますし、常に、その「法則（論理）」に則って行なえば、常に、同じ結果を得ることができます。

例えば、「ボールを遠くに投げる」ためには、単に「力一杯投げる」のではなく、その「動作」に備わっている「法則（論理）」を理解し、それに則って投げる必要があります。

「『ボールを遠くに投げる』メカニズム（法則、論理）」に則った「ボールの握り方」「脚の動かし方」

「重心の移動の仕方」「腕の振り方」等をするからこそ、「ボールを遠くに投げること」ができるのです。

また、常に、その「メカニズム（法則、論理）」に則ってボールを投げれば、常に、「遠くに投げること」ができるのです。

また、「『植物』を理想の状態に育てる」ためには、「その『植物』の成長のメカニズム（法則、論理）」を理解し、それに則って育てる必要があります。

「その『植物』の成長のメカニズム（法則、論理）」に則った「種の播き方」「水のやり方」「肥料のやり方」「手入れの仕方」等をするからこそ、「その『植物』を理想の状態に育てること」ができるのです。

また、常に、その「メカニズム（法則、論理）」に則って育てれば、常に、「理想の状態に育てること」ができるのです。

また、「上手な文章を書く」ため、「上手な説明をする」ためには、「言語の法則（論理）」を理解し、それに則って行なう必要があります。

「言語の法則（論理）」に則り、「正しい単語」「正しい文法」を使って行なうからこそ、「上手な文章を書くこと」「上手な説明をすること」ができるの

です。

また、常に、「言語の法則」に則って行なえば、常に、「上手な文章を書くこと」「上手な説明をすること」ができるのです。

このように、どのような「目的」でも、それを実現させるためには、それに備わっている「法則（論理）」に則って行なう必要がありますし、常に、その「法則（論理）」に則って行なえば、常に、同じ結果を得ることができるのですが、これは、「世の中の全ての『物事』に、それぞれの『法則（論理）』が備わっているから」「世の中の全ての『物事』が、それぞれの『法則（論理）』の上に成り立っているから」起こることです。

もし、それぞれの「物事」に、それぞれの「法則（論理）」が備わっていなかったら、同じ「やり方」で行なっても、毎回違う結果になりますし、「やり方」や「コツ」を人に教えることも、人から学ぶこともできません。

それどころか、「物事」に、それぞれの「法則（論理）」が備わっていなかったら、「やり方」や「コツ」自体がないはずなのです。

「『目的』を実現させるためには、それに備わっている『法則（論理）』に則って行なう必要がある」「常に、その『法則（論理）』に則って行なえば、常に、同じ結果を得ることができる」ということが、「世の中の全ての『物事』に、それぞれの『法則（論理）』が備わっていること」「世の中の全ての『物事』が、それぞれの『法則（論理）』の上に成り立っていること」の証拠なのです。

このことを理解していない人は、「考える（思考する）」ときに、「論理（物事と物事の間にある『法則的なつながり、関係』）」を意識しないので、「物事」と「物事」を「正しく関係付けて」思考を進めません（論理的に思考しません）。

それどころか、ただ漠然と考えたり、「根拠」がない、単なる「憶測」で思考を進めたりしてしまいます。

ですから、このことを理解していない人は、それが「原因」で、「論理的に思考すること」ができないのです。



また、「論理的に思考すること」ができない別の「原因」があります。

それは、「論理」よりも、「自分が信じていること」「自分が思っていること」を優先させているからです。

「信じる」とは、「『理解していないけど、そうだと思いたいこと』を、そうだと思うこと」です。

「信じている状態」とは、「『理解していないけど、そうだと思いたいこと』を、そうだと思っている状態」のことです。

つまり、何かを「信じる」とは、言ってしまうえば、「ただ単に、そう思うこと」「『論理的根拠』や『論理的整合性』を無視して、そう思うこと」なのです。

ですから、「考える（思考する）」ときに、「論理」よりも「自分が信じていること」「自分が思っていること」を優先させていたら、その時点で、「論理的に（物事と物事を正しく関係付けて）」思考していないのです。

「信じること」は、「自信を持つ（自分の能力を信じる）」「明るい未来を信じる」というように、「自分を『いい方向』へ向かわせる」上では有益ですが、実際は、「ただ単に、そう思うこと」「『論理的根拠』や『論理的整合性』を無視して、そう思うこと」なので、「考える（思考する）」ときに、「論理」よりも、「自分が信じていること」「自分が思っていること」を優先させていたら、「正しい答え」を導き出すことはできないのです。

このことから分かるように、「論理」よりも「自分が信じていること」「自分が思っていること」を優先させている場合も、「論理的に思考すること」はできないのです。

また、別の「原因」に、「じっくり考えないこと」があります。

どれほど頭がいい人でも、「『複雑な問題』を解決する」ためには、時間をかけて「じっくり考える」必要があります。

誰でも、必要以上に急いで答えを出そうとした

り、「せかせか」したりして、「じっくり考えること」ができないと、「『複雑な問題』を解決すること」はできなくなります。

つまり、「じっくり考えること」ができないときも、それが「原因」で、「論理的に思考すること」はできなくなるのです。

さて、このように、人間は、いくつかの「原因」によって「論理的に思考すること」ができなくなるのですが、全ての人は、生きていくために様々なことを「考える」必要がありますし、「考える（思考する）」ときには「『正しい答え』を導き出す」必要があるので、「論理的思考能力」は、全ての人にとって必要不可欠だと言えます。

もちろん、それは、「大和思想を実践する人」にとっても必要不可欠です。

「大和思想を実践している人」は、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」ために、「常に、『共存共栄の世の中を維持、つくりだす物事』と『共存共栄の世の中を乱す物事』を見分けている」

必要がありますが、「論理的思考能力」がなければ、それらを見分けることはできません。

また、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」ためには、ときには、「こうすれば、こうなる」「こうなることによって、そうなる」、そして「そうなることによって、『全体』がまとまる」というように、「『全体をまとめる』方法」を考える必要がありますが、「論理的思考能力」がなければ、それぞれを「正しく関係付けること」ができないので、「正しい方法」を導き出すことができません。

また、「問題」や「失敗」の「原因」を解明するときに、「こうしたから、こういう結果になった」と結論を出したとしても、「論理的思考能力」がなければ、「こうした（原因）」と「こういう結果になった（結果）」を正しく関係付けられないので、「本当の原因」を解明することができません。

また、「論理的思考能力」がなければ、誰かの主張を支持するにしても、別の人 の主張を支持するにしても、主張の内容が理解できないので、ただ「信じて受け入れる」しかありません。

ですから、「論理的思考能力」がなければ、「正しい主張」を支持したり「間違った主張」を支持したりしてしまいます。

また、「論理的思考能力」がなければ「嘘を見抜くこと」ができないので、「『共存共栄の世の中』を乱す人」や「言葉が巧みな人」に簡単に騙されてしまいます。

ですから、「論理的思考能力」は、「大和思想を実践する人」にとっても必要不可欠なのです。

「論理」とは、言うなれば、「物事の『正否』を見分けるための道具」です。

「物の『長さ』を測るための道具」は「定規」ですが、「物事の『正否』を見分けるための道具」は「論理」なのです。

物の「長さ」を測るときに「定規」を当てれば、その「長さ」が分かります。

同じように、物事の「正否」を見分けるときに、「論理」に当てはめれば（論理的に思考すれば）、その「正否」が分かるのです。

1メートルの「長さ」を測るときに、たとえ、

10センチの「定規」しか持っていなくても、それをうまく活用すれば、目で見当を付けて測る場合よりも、よほど正確に測ることができます。

同じように、「論理的に思考する」のが苦手な人でも、一つ一つの「物事」を根気よく「正しく関係付けて」思考を進めれば(論理的に思考すれば)、「ただ信じて、受け入れる」場合よりも、よほど「正しい答え」に近付くことができます。

「論理」は「客観的なもの」なので、「論理的に正しい」ということは、「『世の中の全ての人』にとって正しい」ということです。

ですから、「『共存共栄の世の中』を実現させる方法」を「論理的」に考えて導き出し、それを「論理的」に説明すれば、世の中の全ての人に伝えることができますし、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる方法」を、「論理的」に考えて導き出し、それを実行すれば、「普段自分が関わっている『全体』をまとめること」ができるのです。

これらのことから分かるように、「論理的思考能力」は、「大和思想を实践する」上で必要不可欠な

のです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「論理的思考能力」を持っているのです。

## 「優先順位の一番」を「世の中全体」にしている（自己犠牲の精神を持っている）

※ここで言う「『優先順位が一番』を『世の中全体』にしている」とは、「『共存共栄の世の中を維持、作りだすこと』を『最優先のこと』としている」「『自分のこと』よりも、『自分の家族のこと』よりも、『自分が所属している友人の集まりのこと』よりも、『自分が勤めている会社のこと』よりも、『自分が所属している国家のこと』よりも、『世の中全体のこと』を優先させて行動している」という意味です。

また、「『優先順位が一番』を『世の中全体』に

している」とは、「『自己犠牲の精神』を持っている」ということでもあります。

「『自分のこと』や『自分が関わっている全体のこと』よりも『世の中全体のこと』を優先させている」のですから、それは、「『自己犠牲の精神』を持っている」ということでもあるのです。

「大和思想を実践している人」は、「優先順位が一番」を「世の中全体」にしています。

「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人々が、「優先順位が一番」を「世の中全体」にする必要があります。

もし、世の中の全ての人々が、「優先順位が一番」を「自分」にしていたら、世の中の全ての「人」が「対立」することになります。

また、世の中の全ての人々が、「優先順位が一番」を「自分の家族」にしていたら、世の中の全ての「家族」が「対立」することになります。



また、世の中の全ての人々が、「優先順位が一番」を「自分が所属している友人の集まり」にしていたら、世の中の全ての「友人の集まり」が「対立」することになります。

また、世の中の全ての人々が、「優先順位が一番」を「自分が勤めている会社」にしていたら、世の中の全ての「会社」が「対立」することになります。

また、世の中の全ての人々が、「優先順位が一番」を「自分が所属している国家」にしていたら、世の中の全ての「国家」が「対立」することになります。

このように、世の中の全ての人々が、「優先順位が一番」を「自分」や「自分が所属している全体」にしていたら、世の中の全ての「人」や「全体」が「対立」することになるのです。

つまり、「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持すること」ができなくなるのです。

『自分』や『自分が関わっている全体』を優先さ

せる」ということは、「『世の中の秩序』を乱してでも『自分』や『自分が関わっている全体』を優先させる」ということです。

ですから、世の中の多くの人が「優先順位が一番」を「自分」や「自分が関わっている全体」にしていたら、「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持すること」はできなくなるのです。

このことから分かるように、「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人が、「優先順位が一番」を「世の中全体」にする必要があるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「優先順位が一番」を「世の中全体」にしているのです。

さて、三章で説明したように、「全体をまとめる」ためには、「全体を構成する全ての人」が、「優先順位が一番」を「全体」にする必要があります。

ですから、世の中の全ての人、普段の生活の中で、様々な「全体」と関わっていますが、それ

それぞれの「全体」においては、「優先順位の一歩」を「その全体」にする必要があります。

つまり、「家族」においては「優先順位の一歩」を「その家族」にし、「友人の集まり」においては「優先順位の一歩」を「その友人の集まり」にし、「会社」においては「優先順位の一歩」を「その会社」にし、「国家」においては「優先順位の一歩」を「その国家」にする必要があります。

このように、全ての人は、どのような「全体」においても、「その全体をまとめる」ために、「優先順位の一歩」を「その全体」にする必要があるのですが、単純に、このままだと、先ほど説明したように、世の中の全ての「全体」が「対立」することになります。

ですが、世の中の全ての人が「優先順位の一歩」を「世の中全体」にすれば、この問題を解決することができます。

「『共存共栄の世の中』を实现させ、維持する」ためには、世の中を「一つの全体」として見ること

が重要です。

つまり、「『世の中』は一つの大きな『全体』で、その中に『家族』『友人の集まり』『会社』『国家』等様々な『全体』が、『世の中の一部分』として存在している」という見方をすることが重要です。

このような見方で「共存共栄の世の中」を見ると、「『世の中』は『共存共栄の世の中』で、その中に『家族』『友人の集まり』『会社』『国家』等様々な『全体』が、『共存共栄の世の中の一部分を担っている状態』で存在している」ことが分かります。

そして、このことを踏まえて、「優先順位が一番」を「世の中全体」にすると、「全体をまとめること」が、「全体を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その全体の目的を実現している状態』にすること」になります。

「家族をまとめること」は、「家族を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その家族の目的を実現している状態』にすること」で、「友人の集まりをまとめること」は、「友人の集まりを『共存共栄の世の中を維持しつつ、その友人の集まりの目的を実現している状態』にすること」で、「会社をまとめる

こと」は、「会社を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その会社の目的を実現している状態』にすること」で、「国家をまとめること」は、「国家を『共存共栄の世の中を維持しつつ、その国家の目的を実現している状態』にすること」になるのです。

ですから、「優先順位の一歩」を「世の中全体」にすれば、どの「全体」を優先的にまとめても、「『共存共栄の世の中』を乱してしまうこと（他の『全体』と本質的な部分で『対立』すること）」はないのです。

それどころか、「家族」「友人の集まり」「会社」「国家」、その他、どのような「全体」を「まとめる」ための「働きかけ」をしても、それは、「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだす働きかけ」になるのです。

ですから、世の中の全ての人々が、「優先順位の一歩」を「世の中全体」にすれば、世の中の全ての「全体」を、「対立」させることなく「まとめること」ができるのです。

「優先順位の一歩」を「世の中全体」にしなかったら、『普段自分が関わっている全体をまとめる』ための働きかけ」をすればするほど、他の「全体」と「対立」することになります。世の中の全ての人々が、「優先順位の一歩」を「世の中全体」にすれば、世の中の全ての「全体」を、「対立」させることなく「まとめること」ができるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「優先順位の一歩」を「世の中全体」にしているのです。

さて、このように、「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての人々が「優先順位の一歩」を「世の中全体」にする必要があるのですが、そうは言っても、場合によっては、「優先順位の一歩」を「世の中全体」にするのが難しいと思うことがあります。

世の中の全ての人々は、普段の生活の限られた時間の中で、「家族」「友人の集まり」「会社」「国家」等の、普段自分が関わっている「全体」をまとめるなければならないので、どうしても身近な「全体」に意識が向き、「世の中全体」を「優先順位の一歩」

にするのが難しくなるのです。

ですが、実際は、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」ためにこそ、「優先順位の一番」を「世の中全体」にする必要があります。

例えば、「経済混乱」や「戦争」等がある、世の中が混乱しているときに、「家族」「友人の集まり」「会社」「国家」等を「まとめる」のは非常に困難です。

なぜなら、「家族」「友人の集まり」「会社」「国家」等の「全体」は、「『世の中全体』に含まれる全体」なので、世の中が混乱しているときに、それらを「まとめる」のは非常に難しいのです。

逆に、世の中が「まとまっている状態（共存共栄の世の中）」であれば、「個人」と「個人」、「全体」と「全体」は本質的な部分で「対立」していないので、その中で、「家族」「友人の集まり」「会社」「国家」等の「全体」を「まとめる」のは、それほど難しくないので。

つまり、誰でも身近な「全体」に意識が向き、

それを優先的に考えがちですが、実際は、「身近な『全体』をまとめる」ためにこそ、「優先順位が一番」を「世の中全体」にし、「世の中全体」を優先的に「まとめる」必要があるのです。

世の中が混乱しているときに、世の中の全ての人が、「優先順位が一番」を「自分」や「自分が関わっている全体」にしていたら、「混乱」が深まるだけで、世の中は、いつまでたってもまとまりません。

そして、世の中が、いつまでも「まとまらない」ので、結局は、「自分が関わっている『全体』をまとめること」もできないのです。

このように、誰でも、身近な「全体」を「優先順位が一番」にしがちですが、実際に「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」ためには、「優先順位が一番」を「世の中全体」にする必要があるのです。

「大和思想を実践している人」は、このような理由からも、「優先順位が一番」を「世の中全体」にしているのです。



さて、このように、「大和思想を実践している人」は、「優先順位が一番」を「世の中全体」にしているのです。

世の中の全ての人々が「優先順位が一番」を「自分」や「自分が関わっている全体」にしていたら、世の中の全ての「人」や「全体」が「対立」することになるので、「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持すること」はできないのです。

世の中の全ての人々が、「優先順位が一番」を「世の中全体」にするからこそ、全ての「全体」を、「対立」させることなく「まとめること」ができるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「優先順位が一番」を「世の中全体」にしているのです。

## 「謙讓の精神」を持っている

※ここで言う「謙讓の精神」とは、「『謙虚な態度で相手に譲る』精神」「『謙虚な態度で一步下がる』精神」という意味です。

また、「譲る」とは、「機会」「立場」「利益」「順番」「道」「座席」「もの」等を「譲る」という意味です。

「大和思想を実践している人」は、「謙讓の精神」を持っています。

「全体」は「『共通の目的を持った人』の集まり」なので、どのような「全体」においても、「全体を構成する全ての人」は、「全体を構成する一員」という意味では「対等」です。

ですから、誰でも、人と接するときに、相手と

「対等」であろうとすることがありますし、人によっては、常に相手と「対等」であろうとします。

ですが、実際の「人間関係」において、どの状態が「対等」かを正確に言い当てるのは難しいので、ときには「対等」を主張しているつもりでも、実際は「対等以上」を主張していたり、実際は「対等」を主張していても、相手には「対等以上」に見えたりすることがあります。

このような状況で、それぞれが主張を続けて一步も引かなかつたら、いずれ、相手と「ぶつかる」ことになります。そして、その結果、「全体をまとめること」ができなくなります。

ですから、「全体をまとめる」ためには、「『謙虚な態度』で相手に譲る」「『謙虚な態度』で一步下がる」という、「謙譲の精神」が必要になります。

「『謙譲の精神』を持って相手に接する」とは、「対等（50：50）」を必要以上に求めないで、「自分が『49』で、相手が『51』の割合でいいという考え」を持って相手に接するということです。

どのような「全体」を「まとめる」場合でも、ときには「一歩も退かない覚悟」が必要ですが、基本的には、「謙譲の精神」を持って相手に接する方が、「人間関係」が円滑になるので、「全体をまとめる」上では有効なのです。

「対等であること」にこだわり過ぎると、遅かれ早かれ、相手と「ぶつかる」ことになります。

また、自分の「利益」ばかり考え、「相手に譲ること」をしなかったら、「利益」は得られても、「人間関係」は悪くなります。

また、周りの人を押し退けて、自分ばかりが「主張」していたら、周りの人の「反感」を買うことになります。

逆に、常に、「謙譲の精神」を持って相手に接していれば、基本的に、相手と「ぶつかる」ことはないので、「人間関係」は円滑になるのです。

このことから分かるように、「謙譲の精神」は、「人間関係」を円滑にする上で、とても有効なのです。

つまり、「『全体を構成する全ての人』をまとめる」上で、そして「全体をまとめる」上で、とても有効なのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「謙讓の精神」を持っているのです。

「大和思想を実践している人」は、「全体をまとめる」ために、「謙讓の精神」を持っているのです。

さて、「大和思想を実践している人」は、「謙讓の精神」を持っているのですが、「大和思想を実践する人」にとって、「謙讓の精神」は「目的」ではありません。

それは、「全体をまとめる」ための「手段」です。

つまり、「相手のために譲る」という発想ではなく、「『全体をまとめる』ために譲る」という発想です。

ですから、いくら「謙讓の精神」が必要だと言

っても、「譲るべきでないもの」まで譲ってはいけません。

逆に、「全体をまとめる」上で有効なら、一步でも、二歩でも、三歩でも下がって、相手に譲らなければなりません。

「大和思想」には、「世の中の全ての人と共に『幸福』になる」という「目的」があります。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「対等であること」や「『自分の主張』を通すこと」にこだわるのではなく、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること（『共存共栄の世の中』を実現させ、維持すること）」にこだわっています。

そして、そのことにこだわっているので、必要などときには、いつでも「謙虚な態度」で相手に譲っているのです。

常に、「謙譲の精神」を持って相手に接していれば、「人間関係」は円滑になります。

そして、「人間関係」が円滑になるので、よりス

ムーズに「全体をまとめること」ができるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「謙讓の精神」を持っているのです。

## 「優しさ」と「厳しさ」を持っている

「大和思想を実践している人」は、「優しさ」と「厳しさ」を持っています。

「大和思想」の「目的」は、「世の中の全ての人と共に『幸福』になること」です。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「自分の幸福」だけでなく、「『自分以外の全ての人』の幸福」も考える「優しさ」を持っています。

「困っている人を助ける優しさ」「全ての人に対する思いやり」「弱者救済の精神」、「大和思想を実践

している人」は、このような、「『自分以外の全ての人』の幸福」を考える「優しさ」を持っているのです。

また、「大和思想を実践している人」は、「『全体をまとめる』ために必要である」という理由からも、「優しさ」を持っています。

常に、誰に対しても「優しく」接するのは簡単ではありませんが、「全体をまとめる」ためには、「優しさ」が必要になります。

相手に「優しく」接したからといって、その人に「優しく」接してもらえとは限りません。

それどころか、「優しく」接した相手に「冷たく」されることもあります。

また、自分が疲れているとき、悩んでいるとき、困っているとき等には、自分のことで精一杯になり、周りの人に「優しく」接するのが難しくなります。

ですが、「優しさ」を失い、「自分のこと」だけを考えて行動したり、周りの人に「冷たく」接し



たりしていたら、「人間関係」は確実に悪くなります。

また、「優しさ」が全くなかったら、周りの人は、その人に接しづらいので、コミュニケーションが円滑に行なわれなくなり、必要な「情報」を「得ること」や「伝えること」ができなくなります。

ですから、「優しさ」を持っていなかったら、「全体をまとめること」ができなくなるのです。

このことから分かるように、常に、誰に対しても「優しく」接するのは簡単ではありませんが、「全体をまとめる」ためには、「優しさ」が必要になるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、『全体をまとめる』ために必要である」という理由からも、「優しさ」を持っているのです。

さて、このように、「大和思想を実践している人」は「優しさ」を持っているのですが、「優しさ」だけでなく「厳しさ」も持っています。

「全体をまとめる」ためには、「『全体をまとめるために必要なこと』は必ず行なう」必要があります。

たとえば、やりたくなくても、「やる必要がある」なら「しっかりやる」必要がありますし、言いづらくても、「言う必要がある」なら「はっきり言う」必要があります。

「行なう必要がある」ということは、「その行動が必要である」「必ず、それを行なわなければならない」ということです。ですから、「全体をまとめる」ために必要なら、どのような理由があっても、必ず行なわなければならないのです。

ですから、「全体をまとめる」ためには、「厳しさ」が必要になります。

「『行なうべきこと』は必ず行なう厳しさ」「『ダメなものはダメ』とはっきり言う厳しさ」「『必要なこと』は妥協しないで徹底的に行なう厳しさ」、つまり、「自分に対する厳しさ」「周りの人に対する厳しさ」が必要になるのです。

「厳しく」なるべきところで、「心の弱さ」や「同情心」や「甘さ」から、自分に対しても、周りの人に対しても「厳しく」なれなかったら、「全体をまとめること」などできません。

「厳しさ」がなかったら、「『必要なこと』を確実にこなうこと」ができないので、「全体をまとめること」はできないのです。

このことから分かるように、「全体をまとめる」ためには、「厳しさ」が必要になるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「厳しさ」も持っているのです。

さて、このように、「大和思想を実践している人」は、「優しさ」と「厳しさ」を持っているのです。

「優しさ」がなければ、「人間関係」が悪くなりますし、周りの人は、その人に接しづらくなります。

また、「厳しさ」がなければ、「『必要なこと』を  
確実に行なうこと」ができません。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「優  
しさ」と「厳しさ」を持っているのです。

「大和思想を実践している人」は、「全体をまとめ  
る」ために、「優しさ」と「厳しさ」を持っている  
のです。

## 「勇気」と「精神的強さ」を持 っている

「大和思想を実践している人」は、「勇気」と「精  
神的強さ」を持っています。

「大和思想を実践している人」は、常に、自ら率  
先して、普段自分が関わっている「全体」をまと  
めています。実際にそうするためには「勇気」  
が必要になります。

自分が関わっている「全体」を一生懸命まとめ  
ても、もしかしたら「失敗」するかもしれません。

また、逃げ出したくなるような「困難」に直面  
するかもしれません。

「正しい主張」をしても、誤解されたり、理解さ  
れなかったりするかもしれません。

積極的に「『全体をまとめる』ための働きかけ」  
をしても、かえって「批判」されるかもしれませ  
ん。

「『共存共栄の世の中』を維持、つくりだす物事」  
と「『共存共栄の世の中』を乱す物事」を見分けて  
も、「間違った判断」をするかもしれません。

「『共存共栄の世の中』を乱している人」がいたら、  
それを止めなければなりませんし、場合によって  
は、その人と徹底的に闘わなければなりません。

ですから、「常に、自ら率先して、普段自分が関  
わっている『全体』をまとめる」ためには、「勇気」

が必要になるのです。

「失敗を恐れず、積極的に行動する勇気」「困難に立ち向かう勇気」「正しいことを主張する勇気」「批判を恐れない勇気」「決断する勇気」「正しい行動を貫く勇気」、このような「勇気」が必要になるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は「勇気」を持っているのです。

さて、「大和思想を実践している人」は「勇気」を持っていますが、「勇気」だけでなく「精神的強さ」も持っています。

「勇気」が「『積極的な行動』の源」だとすると、「精神的強さ」は「『忍耐力』『我慢強さ』の源」です。

「大和思想を実践している人」は、常に、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体」をまとめていますが、その作業は、常に順調にいくわけではありません。

ですが、作業が順調にいかないからといって簡単に諦めていたら、「全体をまとめること」などできません。

人によっては、「問題」や「困難」があると、すぐにそこから逃げて、楽な方へ、楽な方へと行ってしまいますが、どのような理由があろうと、「行なうべきこと」から逃げていたら、「全体をまとめること」などできないのです。

逆に、「問題」や「困難」があっても、辛抱強く耐え、諦めずに続けていれば、「全体」は、少しずつかもしれませんが、確実にまとまっていくのです。

このことから分かるように、「全体をまとめる」ためには「精神的強さ」が必要になるのです。

「困難に耐える精神的強さ」「簡単に諦めない精神的強さ」「やると決めたことは、最後までやり抜く精神的強さ」「自分の弱さを乗り越える精神的強さ」、このような「精神的強さ」が必要になるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「精神的強さ」も持っているのです。

さて、このように、「大和思想を実践している人」は、「勇気」と「精神的強さ」を持っているのです。

「大和思想を実践している人」は、常に、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体」をまとめていますが、実際に、そうするためには、「積極的」に行動する「勇気」が必要になります。

また、「全体をまとめる」ためには、どのような「問題」や「困難」があっても、それに耐え、乗り越える必要があるので、「精神的強さ」も必要になります。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「勇気」と「精神的強さ」を持っているのです。

「大和思想を実践している人」は、「全体をまとめる」ために、「勇気」と「精神的強さ」を持っているのです。



## 常に「平常心」を保っている

※ここで言う「平常心」とは、「『感情』が一切動いていないときの静かな心」「何もしていないときの落ち着いた心」「気負いも、思い入れも、執着もない平静な心」という意味です。

「大和思想を実践している人」は、常に「平常心」を保っています。

人間には、「喜び」「怒り」「悲しみ」「楽しみ」「浮かれ」「焦り」「嫉妬」「羞恥」「緊張」「驚き」「恐怖」「興奮」等の「感情」があります。

そして、この「感情」は、自分の「意志」とは関係なく勝手に湧いてきます。

「『感情』が湧いている状態（『感情』が動いてい

る状態)」は「『平常心』を失っている状態」ですが、人間は「平常心」を失うと、正しい「判断」や「行動」ができなくなります。

そして、そのために「間違い」や「失敗」をしてしまいます。

例えば、スポーツにおいて、得点を決めた後に「喜び」の「感情」を強く持ち過ぎると（平常心を失うと）、「集中力」が切れて、その隙に相手に得点されることがあります。

また、相手に理不尽なことを言われたからといって、「怒り」の「感情」を強く持ち過ぎると（平常心を失うと）、「言いたいこと」が、うまく言えなくなったり、「言うべきでないこと」を言ってしまうたり、「適切な対応をすること」ができなくなったりします。

また、「嫌なこと」があったからといって、あまりにも「悲しんでいる」と（平常心を失っている）、「ポジティブに考えること」ができなくなったり、「正しい判断」ができなくなったりして、「人生をいい方向へ向かわせること」ができなくなります。

また、「楽しいこと」があるときに、調子に乗って、我を忘れて「楽しんでいる」と（平常心を失っていると）、節度を失い、「間違い」や「失敗」をしてしまいます。

また、褒められたり、おだてられたりして「浮かれ」ていると（平常心を失っていると）、相手に騙されやすくなります。

また、「焦って」いたり、「せかせか」していたりすると（平常心を失っていると）、「じっくり考えること」や「じっくり取り組むこと」ができなくなるので、「間違い」や「失敗」が増えてしまいます。

また、「嫉妬心」を強く持つと（平常心を失うと）、「自分をコントロールすること」ができなくなり、「信用を失う行動」や「大切な『人間関係』を壊すような行動」をしてしまいます。

また、「恥ずかしい」と強く思ったり、ひどく「緊張」したりすると（平常心を失うと）、頭の中が真っ白になり、いつもどおりの「行動」や「立ち居振る舞い」ができなくなります。

また、「驚いた」とき（平常心を失ったとき）には、思わず手にしているものを落としたり、さっきまで考えていたことを忘れてたりしてしまいます。

また、「恐怖心」を強く持つと（平常心を失うと）、「考えるべきこと」が考えられなくなったり、「適切な行動」がとれなくなったりします。

また、「絶対にいい結果を出すんだ」と「意気込み」過ぎていると（平常心を失っている）、気持ち空回りして、かえって「いい結果を出すこと」ができなくなってしまう。

このように、人間は「平常心」を失うと、正しい「判断」や「行動」ができなくなるのです。

そして、そのために「間違い」や「失敗」をしてしまうのです。

さて、このように、人間は「平常心」を失うと「間違い」や「失敗」をしてしまうので、基本的には、「常に『平常心』を保っている」のが望ましいと言えます。

特に、何らかの「目的」を実現させるためには、

「その『目的』を実現させるために必要なこと」は確実にこなう必要があるので、「目的」を実現させるときには、「常に『平常心』を保っている」必要があります。

ですから、「大和思想を実践する」場合も、常に「平常心」を保って、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」必要があります。

「『全体をまとめる』作業」をしているときに「問題」が起きたからといって、「動揺」したり、「冷静さ」を失ったりしたら（平常心を失ったら）、「言うべきこと」が言えなくなったり、「言うべきでないこと」を言ってしまうたり、「やるべきこと」がやれなくなったり、「やるべきでないこと」をやってしまうたりします。

また、思いどおりに「作業」がはかどらないからといって、「イライラ」したり、「せかせか」したりしていたら（平常心を失っていたら）、「正しい判断」ができなくなります。

また、「絶対に『全体』をまとめるんだ二」と「意気込み」過ぎていたら（平常心を失っていたら）、

「気持ち」が空回りして、かえって「全体をまとめること」ができなくなります。

ですから、「大和思想を実践する」場合も、常に「平常心」を保って、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」必要があるのです。

世の中には、『平常心』を失うこと（『感情』が動くこと）を普通のことだと考えて、「平常心」を失っても気にしない人がいます。

ですが、「平常心」を失うと、正常な「判断」や「行動」ができなくなるので、「間違い」や「失敗」は確実に増えるのです。

また、「常に『平常心』を保っている」のは簡単ではありませんが、常に意識し、努力していれば、誰でも、少なからず、「『平常心』を保つこと」ができるようになるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、「常に、意識して『平常心』を保っている」のです。

「大和思想を実践している人」は、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」ために、「常に『平常心』を保っている」のです。

## 常に「向上心」を持っている

※ここで言う「向上心」とは、「自分の『能力』や『性質』等を、『より優れたもの』にしようとする心」という意味です。

また、「『向上心』を持って取り組む」とは、「『自分の能力や性質等を、より優れたものにすること』を考えて取り組む」ということです。

「大和思想を実践している人」は、常に「向上心」を持っています。

「大和思想を実践している人」は、常に、自ら率

先して、普段自分が関わっている「全体」をまとめていますが、「実際に『全体をまとめること』ができるかどうか」は、「『全体をまとめる能力（技術）』があるか、ないか」によって決まります。

「『全体をまとめる』能力（技術）」には、「『全体をまとめるために必要なこと』を見抜く能力」「『全体を構成する全ての人をまとめる』能力」「『人を育てる』能力」「『全体を統制する』能力」「『共存共栄の世の中を維持、つくり出す物事』と『共存共栄の世の中を乱す物事』を見分ける能力」「論理的思考能力」「優しさ」「厳しさ」「勇気」「精神的強さ」「常に『平常心』を保つ能力」「常に、自分をしっかりコントロールする能力」等があります。

このような「能力（技術）」があれば、「全体をまとめること」ができますが、なければ「全体をまとめること」はできません。

また、その「能力（技術）」が高ければ、より「全体をまとめること」ができますが、低ければ、あまり「全体をまとめること」はできないのです。

さて、「『全体をまとめること』ができるかどうか」は、「『全体をまとめる能力（技術）』があるか、



ないか」によって決まるので、「『全体をまとめる能力（技術）』を高めること」は、「大和思想を実践する」上で（「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」上で）、とても重要になります。

世の中には、「能力（技術）」が高い人もいれば、低い人もいますが、誰でも、どのような「能力（技術）」でも、それを高める「努力」をすれば、以前の状態よりは高めることができます。

「『どうすれば、自分の能力（技術）をより優れたものにすることができるか』を考える」「その考えに基づいて実行する」「その結果を分析する」、そして「その分析に基づいて、さらに『どうすれば、自分の能力（技術）をより優れたものにすることができるか』を考える」「その考えに基づいて実行する」「その結果を分析する」、そして、また、「その分析に基づいて、さらに『どうすれば、自分の能力（技術）をより優れたものにすることができるか』を考える」「その考えに基づいて実行する」ということをひたすら繰り返せば、どのような「能力（技術）」でも、以前よりは高めることができるのです。

「能力（技術）」は、「これで十分」と思ったら、それ以上は高まりません。

ですが、「分からないこと」を分かろうとし、「できないこと」をできるように「努力」し、うまくできなくても、諦めずに挑戦し続けていれば、つまり、常に「向上心」を持って取り組んでいれば、少なからず高めることができるのです。

特に『全体をまとめる』能力（技術）」は、特別に、そのための時間をつくらなくても、普段の生活の中で高めることができます。

例えば、普段自分が関わっている「家族」「地域社会」「友人の集まり」「学校」「会社」「国家」等において、常に、「どうすれば『全体を構成する全ての人をまとめること』ができるか」を考え、工夫し、そのための「働きかけ」をしていれば、徐々に、そのために必要なことが理解できるようになりますし、その「能力（技術）」は高まります。

また、誰でも、普段の生活の中で様々なことを考えますが、「考える」ときに、常に「論理的に思考すること」を意識し、人の話を聞くとときや、何らかの情報に接するときにも、常に、「論理的整合

性」を意識していれば、徐々に「論理的思考能力」は高まります。

また、人と接するとき、常に、「優しさ」と「厳しさ」を意識していれば、徐々に、「『優しさ』と『厳しさ』を持って相手に接すること」ができるようになります。

また、様々な「行動」や「立ち居振る舞い」をするときに、常に、「勇気」「精神的強さ」「『平常心』を保つこと」を意識していれば、徐々に、その「能力」は高まります。

このように、「『全体をまとめる』能力（技術）」は、常に「向上心」を持って生活していれば、普段の生活の中で高めることができるのです。

「『全体をまとめること』ができるかどうか」は、「『全体をまとめる能力（技術）』があるか、ないか」によって決まります。

ですから、「『全体をまとめる能力（技術）』を高めること」は、「大和思想を実践する」上で（「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」上で）、

とても重要なことなのです。

また、この「『全体をまとめる』能力（技術）」は、常に「向上心」を持って生活していれば、普段の生活の中で高めることができるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、常に「向上心」を持っているのです。

「大和思想を実践している人」は、「より、普段自分が関わっている『全体』をまとめること」ができるようになるために、常に「向上心」を持っているのです。

## 常に「真剣さ」を持っている

「大和思想を実践している人」は、常に「真剣さ」を持っています。

「『大和思想を実践する人』のあり方」の「根本」は、「常に、自ら率先して、普段自分が関わってい

る『全体』をまとめていること」ですが、実際に「全体をまとめる」ためには、常に「真剣さ」を持っている必要があります。

「真剣さ」がなく、「軽い気持ち」「浮ついた気持ち」でいたら、様々な「問題」を解決し、様々な「困難」を乗り越えていくことなどできません。

また、ふざけあって、冗談ばかり言っていたら、『全体を構成する全ての人』をまとめることなどできません。

また、「真剣さ」がなく、「格好」つけてばかりいたり、「へらへら」したりしていたら、『必要なこと』を確実にこなすことなどできません。

また、常に「真剣さ」を持っていなければ、「失敗」を未然に防ぐことはできません。

これらのことから分かるように、常に「真剣さ」を持っていなければ、「全体をまとめること」はできないのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、常に「真剣さ」を持っているのです。

さて、「大和思想を実践している人」は、常に「真剣さ」を持っているのですが、「常に『真剣さ』を持って生きる」と言うのと、それは、「真面目」で「堅苦しい」「つまらない生き方」のように思うかもしれません。

たしかに「真剣に生きる」と、理想を高く持つことになるので、苦勞が増えるのは事実です。

ですが、実際は、「『真剣に生きること』を楽しむ」というのは、誰にでもできることです。

常に、「真剣」に「向上心」を持って、「『普段自分が関わっている全体をまとめる』ための働きかけ」をしていけば、「『全体をまとめる』能力」が身に付くので、徐々に、「普段自分が関わっている『全体』をまとめること」ができるようになります。

そして、徐々に、普段自分が関わっている「全体」がまとまっていくので、徐々に、そこからの

「ストレス」がなくなり、「楽しむこと」「気楽でいること」ができるようになります。

このようなことを実感しながら、「常に『真剣さ』を持って生きる」というのは、「つまらないこと」ではなく、「楽しいこと」のはずなのです。

また、それは、誰にでもできることなのです。

世の中には、ふざけ合って、冗談ばかり言って、テキトウでいる方が、「真剣」でいるより「気楽」でいいと思っている人がいます。

確かに、それで何の問題もなければ、その方がいいと思います。

ですが、常に、ふざけ合って、冗談ばかり言って、テキトウでいたら、「家族」「地域社会」「友人の集まり」「会社」「国家」等の、普段自分が関わっている「全体」を「まとめること」などできないのです。

そして、それらを「まとめること」ができないので、結局は、常に、そこから「ストレス」を受

けることになるのです。

「気楽でいること」や「冗談を言うこと」は、それ自体は「悪いこと」ではありません。

ですが、「真剣さ」を完全に失ったら、「全体をまとめること」も『共存共栄の世の中』を実現させ、維持することもできなくなるのです。

つまり、「幸福になること」ができなくなるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、常に「真剣さ」を持っているのです。

「気楽にしている」ときでも、「楽しんでいる」ときでも、「冗談を言っている」ときでも、その他、どのようなことをしているときでも、心のどこかに「真剣さ」を持っているのです。

「大和思想を実践している人」は、「普段自分が関わっている『全体』をまとめる」ために、常に「真剣さ」を持っているのです。



## 常に「健康」を維持している

「大和思想を実践している人」は、常に「健康」を維持しています。

『大和思想を実践する人』のあり方の「根本」は、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめていること」ですが、実際に、そうするためには、常に「健康」を維持している必要があります。

人間は「健康」でなかったら、「実力」を十分に発揮することができません。

また、いくら「頑張らなければ」と思っても、頑張る「意欲」が湧いてきません。

また、「健康」でなかったら、作業に「集中」することができません。

また、「全体をまとめる」ためには、様々な「問題」や「困難」を乗り越えるための「元気」が必要になりますが、「健康」でなかったら「元気」が湧いてきません。

また、「健康」を損ねたら、『全体をまとめる作業』を続けること」ができなくなります。

これらのことから分かるように、常に「健康」を維持していなければ、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめること」はできないのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、常に「健康」を維持しているのです。

さて、「大和思想を実践している人」は、「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめること」ができるように、常に「健康」を維持していますが、これは、「常に、様々な『全体』における『自分の役割』をしっかりと果たすこと」ができるように、常に「健康」を維持しているということでもあります。

どのような「全体」でも、「全体の目的」を実現させるためには、「全体を構成する全ての人」が、「自分の役割」をしっかりと果たす必要がありますが、「健康」を損ねたら、「自分の役割」をしっかりと果たすことができなくなります。

そして、「自分の役割」をしっかりと果たすことができなくなるので、「全体」は、その人の働きの「不足分」は確実にまともらなくなります。

「健康」を損ねて「自分の役割」をしっかりと果たすことができなくなっても、周りの人が、その人の働きの「不足分」をカバーできれば、まだいいですが、作業によっては、「本人にしかできないこと」もありますし、場合によっては、周りの人の負担が大きくなりすぎて、「全体をまとめること」ができなくなってしまうます。

「全体」は、「『全体を構成する全ての人』の働き」によって成り立っているのです、たとえ一人でも、「自分の役割」をしっかりと果たすことができなくなったら、その影響は、少なからず「全体」に及びますし、場合によっては、「全体をまとめること」ができなくなるのです。

このことから分かるように、「全体をまとめる」ためには、「全体を構成する全ての人」が「自分の役割」をしっかり果たす必要がありますが、そのためには、「全体を構成する全ての人」が、自分の「健康」を維持する必要があるのです。

ですから、「大和思想を実践している人」は、常に「健康」を維持しているのです。

「常に、様々な『全体』における『自分の役割』をしっかり果たすこと」ができるように、常に「健康」を維持しているのです。

さて、「健康を維持する」と言うと、子供じみて聞こえるかもしれませんが、「健康」こそ、あらゆる活動の「源」です。

人間のあらゆる活動の結果は、「健康」に大きく左右されます。

「健康なとき」と「そうでないとき」では、活動の結果に大きな違いが出るのです。

それどころか、「健康」を損ねたら、活動そのものができなくなることもあるのです。

「大和思想を实践する」場合も、「健康なとき」と「そうでないとき」では、『全体をまとめる』ための働きかけ』の結果に大きな違いが出ます。

それどころか、「健康」を損ねたら、その「働きかけ」自体ができなくなることもあるのです。

ですから、「大和思想を实践している人」は、常に「健康」を維持しているのです。

「常に、自ら率先して、普段自分が関わっている『全体』をまとめること」ができるように、常に「健康」を維持しているのです。

## まとめ

それでは、ここで、五章の「まとめ」をしたい

と思います。

「『共存共栄の世の中』を実現させ、維持する」ためには、「世の中の全ての『人』を『共存共栄の世の中を維持して生きている状態』にする」必要があります。

そして、「世の中の全ての『人』を『共存共栄の世の中を維持して生きている状態』にする」ためには、「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」を具体的に描き出す必要があります。

そこで、五章では、「『大和思想を实践する人』のあり方（『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方）」について説明しました。

「『大和思想を实践する人』のあり方」は、次のとおりです。

常に、自ら率先して、普段自分が関わっている「全体」をまとめている

常に、あらゆる「恩恵」に心から「感謝」して

いる

常に、自分の「運命」を受け入れている

常に、「共存共栄の世の中を維持、つくり出す物事」と「共存共栄の世の中を乱す物事」を見分けている

「論理的思考能力」を持っている

「優先順位の一番」を「世の中全体」にしている  
（自己犠牲の精神を持っている）

「謙譲の精神」を持っている

「優しさ」と「厳しさ」を持っている

「勇気」と「精神的強さ」を持っている

常に「平常心」を保っている

常に「向上心」を持っている

常に「真剣さ」を持っている

## 常に「健康」を維持している

これが、「『大和思想を实践する人』のあり方」  
なのです。

「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」  
には様々なものがあります。

ですから、ここで説明したことが、「唯一絶対の  
あり方」というわけではありません。

ですが、ここで説明したことは、「『共存共栄の  
世の中』を実現させ、維持する」上で、とても重  
要なことばかりです。

世の中の全ての人には、それぞれの「生き方」  
があっていいのですが、「『共存共栄の世の中』を  
実現させ、維持する」ためには、世の中の全ての  
人が、このような点をしっかり押さえた上で、そ  
れぞれの「生き方」をしている必要があるのです。

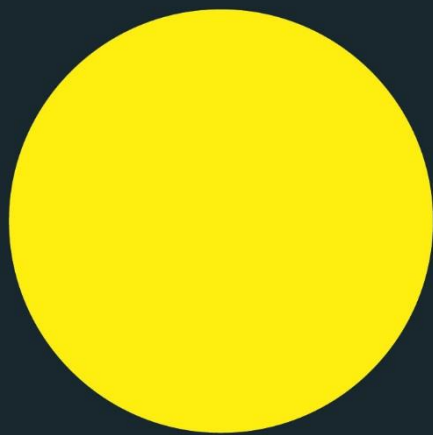
ですから、「大和思想を实践している人」も、そ  
うでない人も、ここで説明したことは、しっかり  
覚えておいてください。



そして、必要なときは、いつでも、頭の中に具体的に描き出してください。

「『共存共栄の世の中』における『人間』のあり方」を具体的に描き出すことができれば、後は、世の中の全ての人を「その状態」にするだけで、世の中の全ての人が、「『共存共栄の世の中』を維持して生きている状態」になるのです。

少なくとも、「自分」を「その状態」にすれば、「自分」は、「『共存共栄の世の中』を維持して生きている状態」になるのです。



やまと

しそろう

五章